

# コロナ禍と戦う世界と今後の展望

望ましい世界を再構築するために求められていることは。

(2020年9月15日、日外協ウェビナー「コロナと戦う世界と今後の展望」から抜粋)

東京都公立大学法人(東京都立大学) 理事長  
慶應義塾大学 名誉教授

島田晴雄

## 司令塔が不在の日本

コロナパンデミックは100年に1度の世界的大事件と言ってよい。

新型コロナウイルスが最初に発生した武漢は、人口1200万を擁する科学技術先端都市だ。中国政府は迅速で徹底した取り組みを行い、3月上旬には収束させた。このころから欧州、米国での被害が拡大。日本でも3月に入って感染者が急増した。そして、4月7日に緊急事態宣言、店舗は休業、人々には外出しないよう自粛要請が出された。

早期に感染拡大に歯止めをかけることに成功した台湾や韓国には、全省庁に指示できる司令塔がある。だが、日本には存在しない。PCR検査は医療崩壊を招くからと実施が進まなかった。日本は医師をはじめ医療スタッフが世界の主要国に比べ圧倒的に不足しているにもかかわらず、法律(感染症法)で感染者には入院が義務付けられているからだ。PCR検査を徹底し、



大型連休が始まり観光客の人だかり(北京・故宮博物館、2020年10月1日)  
(提供:朝日新聞社)

陽性反応が出た者のうち行動が活発な若い人だけを隔離する。感染していない者は自由に行動できるようにすれば、感染拡大も経済活動の停滞も防ぐことができる。メリハリのある対策が求められる。

## 容易ではないワクチン開発

医療崩壊を防ぐためには経済活動をストップせざるを得ない。結局、世界経済はリーマンショック以来の落ち込みに見舞われた。特に深刻なのは新興国と途上国・貧困国。ブラジルでは、スラム街に住む貧困層は都市封鎖などしていたら生きていけない。ボルソナロ大統領は「カゼみたいなもの」と言って経済活動を優先した。社会保障費を削り続けてきたロシアでも感染が拡大した。インドに10億人いると言われる貧困層は、水道がなく手も洗えない。検査をしたら全て感染者かもしれない。こうした人々が世界には40億人もいる。こうした国々で感染爆発が起きれば、間違いなく先進国にも波及する。

ワクチンは当面、期待できそうにない。世界の製薬大手がワクチン開発にしのぎを削っているが、治験などを繰り返し通常は10年かかるという。変異を繰り返すウイルスに合わせてワクチンを開発するには、膨大な時間と費用が必要になる。いったい、いつになれば貧困国に行き渡らせることができるのだろうか。

コロナ禍が3~4年続けば、全世界で感染者